北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

教員養成大学の学生の移行期における地域間移動と時間的展望

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-09-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 半澤, 礼之
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008929

ＥＳＤ・環境教育研究 (Journal of ESD and Environmental Education) **23**:11-16 (2021)
北海道教育大学釧路校ＥＳＤ推進センター

教員養成大学の学生の移行期における地域間移動と時間的展望

半　澤　礼　之
北海道教育大学釧路校

Interregional Migration and Time perspective of Teacher Training College Students at School to Work Transition

Reino Hanzawa
Hokkaido University of Education, Kushiro Campus

1. 問題と目的

1-1. 教員養成・学校教育における地域の強調と学ぶ場・働く場の異同

学校と地域の連携や協働が強調されている現代（中央教育審議会，2015 ; 宮前・平岡・安井・添田，2017 ; 安井，2019）において、教員養成の文脈でもその学びの中に地域という視点を導入することの重要性が増している。半澤・宮前・浅井（2020）は、教師になるための学びの中に地域という視点が導入されるケースについて次の三点を指摘した。

一点目は、地域を素材とした教材開発がおこなわれるケース（深見 , 2016）、二点目は、個々の授業において理念として地域との協働の重要性が強調される、もしくはそれを強調するような授業プログラムが開発されるケース（川前 , 2015；宮前 , 2016）、三点目は、当該大学が立地している地域と関わりながら学ぶことが大学のアドミッションポリシーなどに明示され、地域との関わりの中で教員になることが目指されるケース（根岸 , 2013）である。

このような教員養成への地域という視点の導入によって、大学での学びがその大学がおかれている地域との関係の中で再構築される／されている可能性がある（たとえば赤沢 , 2016；宮前 , 2016；高田・堀田 , 2017）。しかし学生は、そのような学びの展開が想定される大学が所在する地域で卒業後に教員になるとは限らない。仕事に就くために、大学がおかれている地域から別の地域へと移動する学生の存在が想定できるだろう。そして、先述のような学校教育における地域の強調から、そこでの学校教育はそこに置かれている地域との関係のなかで再構築されている可能性もある。このような学校から社会への移行期における地域間移動は、大学生活のいつ頃から展望されるのだろうか。また、その展望を学生はどのように捉え、そしてそれは彼らの教師になるための学びに対してどのような影響を与えるのだろうか。

1-2. 学校から社会への移行期としての大学生

大学生は、青年期から成人期へという発達段階上の移行期であり、学校から社会へという役割上の移行期でもある。山本・ワップナー（1991）は、私たちが生まれてから死ぬまでの人生のプロセスの中で生じる変化の過程を「人生移行」と呼び、そこには危機が内包されている可能性があるとした。また、特に人生の出来事や移動によって環境が変わることを環境移行と呼んだ。先述した「大学生として学んでいた場」と「その学びを実践する場」が異なることで生じる地域間移動は人生移行であり、環境移行でもあると言うことができるだろう。このような時期においてそこに様々な困難が生じる可能性は想像に難くない。地域間移動を展望して学生生活を送る大学生にとって、この危機はどのように経験されるのだろうか。この時期を対象として研究を行うことは、移行期の大学生支援にとって重要であると考えられる。

1-3. 大学から社会への移行における地域間移動

この大学から社会への移行期における地域間移動については、地域間移動のパターンやそのパターンによる属性の違い（田澤・梅崎・唐澤 , 2013；田澤・梅崎 , 2017）や、地域間移動のパターンによるキャリア志向の違い（小山 , 2017）などがこれまでに日本では検討されてきた。これらの研究は、実際に移動をおこなった者を対象としているものが多く、これから地域間移動を行う大学生がそれをどのように捉えているのか、またその捉え方が彼らの学生生活にどのような影響を与えるのかについては十分

に検討されているとは言えない。特に、先述のように地域との関係が強調される学校教育や教員養成の文脈においては、地域間移動の捉え方が彼らの大学での学びに影響を与える可能性がある。地域間移動の捉え方やその影響について検討を行う必要があると言えるだろう。

1-4. 地域間移動を展望した大学生の時間的展望

都筑（1999）は、青年期は過去、現在、未来を統合し、ある一時点における個人の心理学的過去、および未来についての見解の総体である時間的展望（Lewin,1951）を確立する時期だとした。また、その確立は青年期の発達の主題となるアイデンティティ（Erikson,1959）と関連をもつ可能性があることを指摘している（都筑 , 1999）。

これまで述べてきた大学から社会への移行期における地域間移動は、過去・現在・未来における生活や学び、そして仕事を行う場の違いによって生じるものであると言える。学校から社会へという役割の移行にくわえて、そこで場の移動が生じるということから、場という側面においても過去・現在・未来の統合が行われる必要があるかもしれない。移行期にある学生時代において地域間移動を展望することは、大学生の時間的展望にどのような影響を与えるのだろうか。

1-5. 本研究の目的

以上の議論より、地域の強調がなされている教員養成や学校教育の文脈の中で、移行期を対象として地域間移行を学生がどのように捉えているのか、そしてそれは彼らの大学での学びや時間的展望に対してどのような影響を与えているのかについて検討することは重要であると考えられる。また、この点について検討した研究が多くないことから、探索的な調査を行い、仮説生成のための基礎的な資料を収取する必要があるだろう。

したがって本研究では、教員養成大学に所属する大学4年生を対象として、「大学生として学んでいた場」と「その学びを実践する場」が異なること、つまり、学校から仕事・社会への移行期において地域間移動を行うという展望に対して、彼らがどのような意識を持っており、それは大学での学びや時間的展望にどのような影響を与えるのかについて、面接調査によって探索的な検討を行うこととする。

2. 方法

2-1. 調査対象者

卒業後の就職において地域間移動を行う予定の大学4年生15名（男性6名女性9名）。調査対象者の在籍する大学は、アドミッションポリシーの中で学校と地域社会の関わりに対して関心を持っている人を求める学生像としてあげており、「問題と目的」で述べた地域の強調が行われている大学であると考えられる。調査対象者は全員「出身の地域」と「所属大学の所在地域」が異なっていた。また、15名中14名は、卒業後に「出身の地域」で学校教員として働くことが決まっている者であった。つまりこの14名は、就職に伴い地元に帰る予定であった。また、1名は、「出身の地域」や「所属大学の所在地域」とは異なる地域で学校教員として働くことが決まっていた。

2-2. 調査時期

2015年11月～12月

2-3. 調査方法

四年間の大学生活を振り返ってもらいながら、「大学進学動機」「大学での学びの様子」「就職先の地域を決めた時期や理由」、「地域を移動することに対する考えや気持ち」、「大学での学びと将来の仕事との関連」などを主たる質問とする半構造化面接を実施した。面接時間は平均45分であり、面接内容は調査対象者の了承を得て録音を行った。分析にあたっては、録音された音声データを文字おこしして発話データを作成し、それを分析の対象とした。

2-4. 倫理的配慮

調査対象者には、調査は匿名で実施し回答は研究目的以外では使用しないこと、回答内容によって不利益を被ることはないこと、回答は強制ではないので答えたくない質問にこたえる必要はないこと、途中で調査協力をやめることもできることを説明し、同意を得た。

3. 結果と考察

3-1. 就職先の地域を決めた時期

はじめに、調査対象者が就職先の地域を決めた時期について整理をおこなった。その結果、14名中11名が大学1年生の段階で地元で教員になるということを決めていた。その理由は、11名全ての調査対象者が「地元に帰りたいから」であった。残りの3名は、大学生活の中で

どの地域に就職しようか揺れていたが、「地元」という選択肢は常にもっていたとのことであった。この 3 名の最終的な決定は大学 3 年生の後期以降であった。大学 3 年生の後期は調査対象者の教育実習が終了した時期であり、それが影響しているということであった。

3-2. 地域間移動の展望に対する意識と大学での学び、時間的展望

次に、得られた発話データを内容ごとに切片化し、それを心理学を専門とする研究者 1 名と心理学を専攻する学部生 2 名で分類した。はじめに、地域間移動の展望に対する意識が含まれると考えられるを切片を抽出して分類をおこなった。そこから、その意識の背景にある要因だと考えられるものを整理して、カテゴリーの作成をおこなった。

その結果、Table1 のカテゴリーが得られた。地域間移動の展望に対する意識を表すカテゴリーとして、「地域間移動に対する不安とその対処」と「地域間移動に対する不安のなさ」の 2 つが得られた。本研究は大学 4 年生の 11 月～ 12 月に実施されており、すべての調査対象者は進路が決定していた。その時期の大学生から地域間移動に対する不安に関わるカテゴリーが得られるのは、妥当な結果であると考えられる。

Table1.　地域間移動に対する意識と行動

カテゴリー	下位カテゴリー	下位カテゴリーの説明
地域間移動に対する不安とその対処	地元での仕事を展望した学び	地元に帰ることを展望して学びを進めていた / いるという過去や現在
	環境の違いの認識	現在学んでいる環境と将来働く環境は異なるという認識
	大人としての地元参入	地元に「児童・生徒・学生」ではなく「社会人」として参入するのだという意識
地域間移動に対する不安のなさ	地元であること	将来の移動先が地元であるという事実
	楽観的な将来展望	仕事に就くのは地元なので「なんとかなる」という将来展望
	学びへの信頼	過去に大学で学んだことは移動先がどこであっても通用するという信頼

「地域間移動に対する不安とその対処」は、地域間移動に対する不安とその背景、またその不安に対処するための大学生活の中での様々な取り組みを表すカテゴリーであると考えられる。このカテゴリーには、【地元での仕事を展望した学び】、【環境の違いの認識】、【大人としての地元参入】の三つの下位カテゴリーが含まれていた。また「地域間移動に対する不安のなさ」は、地域間移動に対する不安のなさとその背景を表すカテゴリーであると考えられる。このカテゴリーには、【地元であること】、【楽観的な将来展望】、【学びへの信頼】の三つの下位カテゴリーが含まれていた（以下、「」で括られているものはカテゴリー、【 】で括られているものは下位カテゴリーを表す）。

以下に、それぞれのカテゴリーとそこに含まれる下位カテゴリーについて説明を行い、当該カテゴリーが表れていると考えられるエピソード例を示す *[1]。

3-2-1.「地域間移動に対する不安とその対処」について

先述したように、このカテゴリーは地域間移動に対する不安とその背景、またその不安に対処するための大学生活の中での様々な取り組みを表すカテゴリーだと言えるだろう。また、三つの下位カテゴリーについては次のように考えられる。

【地元での仕事を展望した学び】とは、就職に伴う地域間移動の展望が大学での学びに影響を与えた結果表れた下位カテゴリーだと考えられる。地域間移動を行うためにどのような学びが大学生活の中で必要なのかを考え、それに取り組んでいることを表す下位カテゴリーだと言えよう。地域との関わりの中で仕事が進められる領域であるからこそ生じたカテゴリーであり、先述の地域と学校の協働の強調（安井 , 2019）が反映されたものであると考えられる。【環境の違いの認識】は、現在大学生として学んでいる場所と、その学びを活かす場である将来働く環境が異なるということの認識を表す下位カテゴリーだと考えられる。そして【大人としての地元参入】は、地元に「児童や生徒、学生」としてではなく「社会人」として参入するという、同じ地元でもそこで果たす役割が異なることについて意識を表すものだと言えるだろう。地域間移動の展望が、その場で自らが果たす役割の違いの認識につながった可能性がある。これらのカテゴリーが表れていると考えられるエピソードを以下に示す（エピソード 1）。

エピソード 1：地域間移動に伴う将来の職業への不安とそれを解消するための大学での学びが表れているエピソード

「もともと地元に帰るつもりだったんですよ。だから、

その、なるべく地元でも使えそうな授業とかとって【地元での仕事を展望した学び】。実習もへき地（校実習）にもいったんですよ。うち（地元）って、そういうの、そういうとこ行く（赴任する）可能性もあるし【地元での仕事を展望した学び】。まあ、興味があったのもあるけど。でも、勉強すると、やっぱ違うかな～って、ここ（大学）と地元じゃ違うんじゃないかなって思って【環境の違いの認識】。・・・（中略）・・・調べたら、やっぱり事情が違う部分が結構あって【地元での仕事を展望した学び】。そうすると子どもたちとか、あと保護者ですよね。でかい。それも違ってくるだろうなぁとか【環境の違いの認識】。・・・（中略）・・・なんか、単純に地元だからっていっても、分からないこともあるし、特に先生として行くのって、住むのとは違うわけで【大人としての地元参入】。違いますよね？」

*【 】発話に該当する下位カテゴリー、（ ）は筆者による補足を表す。以下同様。

エピソード1から、学校から社会への移行において地域間移動を展望することで、地域の違いである【環境の違いの認識】や役割の違いである【大人としての地元参入】という認識を抱いていること、またその移動に対して不安を抱いていることが推察できる。そして、そのような不安に対して【地元での仕事を展望した学び】という形で対処していることが見てとれるのではないだろうか。つまり、地域間移動の展望が、大学での学びのあり方に影響を与えている可能性があると考えることができるだろう。

また、時間的展望という観点からは、この不安やその対処について次のように考えることができる。エピソード1に表れている【大人としての地元参入】という過去と未来の役割の違いの理解や、【環境の違いの認識】という現在の学びと未来の職業の場の違いの理解は、過去・現在・未来のつながりが切れてしまう出来事として経験されているかもしれない。現在における【地元での仕事を展望した学び】は、切れてしまったつながりを再びつくろうとする取り組みだと考えることもできるのではないだろうか。地域間移動の展望によって生じた過去･現在･未来のつながりの切断を、現在における取組によって修復しようとする試みとして理解できるだろう。

3-2-2.「地域間移動に対する不安のなさ」について

このカテゴリーは地域間移動に対する不安のなさとその背景を表すカテゴリーであると考えられる。そして、【地元であること】、【楽観的な将来展望】、【学びへの信頼】の三つの下位カテゴリーが含まれていた。

【地元であること】は、地域間移動をする先が地元であるということを示す下位カテゴリーであった。【楽観的な将来展望】は、【地元であること】との関連において、地域間移動をする先が地元であるため、様々な困難があったとしても「なんとかなる」だろうという将来展望を示す下位カテゴリーだと言える。地元志向の研究でも指摘されている（山口 , 2014）、ソーシャルサポートを受けられる可能性の高さや物的・人的資源の存在（親や友人）に基づくものだと考えられるだろう。このような強い紐帯（Granovetter, 1973）と呼ぶことのできるネットワークの存在の想定を背景として、これらのカテゴリーが生じたと考えられる。そして【学びへの信頼】は、大学で学んだことは移動先がどこであっても通用するという大学での学びに対する信頼を表す下位カテゴリーだと言える。以下に、これらのカテゴリーが表れていると考えられるエピソードを示す（エピソード2）。

エピソード2：「地元」に帰ることを背景とする地域間移動への不安のなさが表れているエピソード

「特に地域の差とかは考えてないですね。地元だし、はい。【地元であること】。大丈夫かなって。あまりそういうの意識して勉強とかもしてこなかったですし。（違う土地で）いろいろ新しい経験も出来ましたし。だから、それを地元に持ち帰ってみようっていうのは、はい。言われればそういうのはあるかもしれません。ただ、まあ、正直そういうのを意識して大学で勉強してたかっていうと、それはあんまりないですけど。・・・（中略）・・・でも、学んだことはきっと無駄にはならないと思うんですよ【学びへの信頼】。なんでって聞かれるとわからないんですが、きっと大丈夫！ってなんとなく思ってます（笑）　特に心配とかはしてないですね。何かしら先生になったときにはつながるんじゃないかなって。何がどうっていうのは具体的にはいえないですが、つながる、つなげるんじゃないかなって思ってるのはあります【楽観的な将来展望】。・・・（中略）・・・なんででしょう。やっぱ地元だからですかね。地元だし。地元だからやっていけるんじゃないかな～って思います。親もいますしね。昔の友達もいるし。地元って安心感ないですか？【地元であること】」

エピソード2から、地域間移動に伴う移行先が【地元

であること】は、仕事に就くのは自分が大学生になるまで過ごしてきた地元であるので「なんとかなる」という【楽観的な将来展望】と結びついていると考えられるだろう。そしてその結びつきが、移動の不安を抑制もしくはそもそも生じさせない要因のひとつになっている可能性があると言える。また、そこに【学びへの信頼】が加わり、地域間移動に対する不安もなく学びに対する信頼もあることから、結果として地域間移動を展望した学びが行われていない様子をうかがうことができる。時間的展望という観点からは、【地元であること】や【学びへの信頼】が背景となって過去・現在・未来のつながりが維持されており、具体的な将来を展望した現在の学びが表れなかったエピソードだと考えられるのではないだろうか。

3-3. まとめと今後の課題

以上の結果から、地域間移動の展望は、過去・現在・未来のつながりを作ること（エピソード2）、そしてつながりを失わせること（エピソード1）にも関わる可能性が示唆された。そして、そのつながりの有無によって現在の学びのあり方にも違いを見ることができた。したがって、地域間移動を展望することは社会に出たあとの将来展望形成と関わりを持ち、それが現在の学びに影響を与えるという過程を想定することができるのではないだろうか。

今後の課題として2点述べる。1点目は、本研究の知見を教員養成の文脈により位置づける必要性である。本研究は教員養成大学の学生を対象として検討をおこなった。ここで示された過程は、エピソードとしては教員養成の内容を含んでいたものの、得られたカテゴリーは教員養成大学の学生に特有の現象ではない可能性がある。今後は、この現象を教員養成大学の文脈に位置づけてさらに検討し、その特徴を明らかにしていく必要があるだろう。2点目は、これらの地域間移動の展望が、実際に職業に就いたときにどのように働くのかについて検討する必要性である。大学時代にこれらの展望を行い学生生活を行うことが、職場への初期適応にどのように働くのか検討することによって、学校から社会への移行期に対する理解をより深めることができると考えられる。

注）

*1　発話データについては、個人の特定を行うことができないように大意を変えない範囲で表現等の修正を行っている。

引用文献

赤沢早人（2016）. 地域一体型教育実習プログラムの開発－「京都大原学院教育インターンシップ」の試行をふまえて－　次世代教員養成センター研究紀要 , 2, 329-333.

中央教育審議会（2015）新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）

Erikson, E. H.（1959）. Psychological issues. Identity and the life cycle. New York: International University Press.（エリクソン , E.H（小此木圭吾訳編）（1982）.　自我同一性－アイデンティティとライフサイクル　誠心書房）

深見俊崇（2016）. 教員志望学生のカリキュラム開発力量に資するプログラムの開発.　日本教育工学会論文誌 , 40（Suppl.）, 181-184.

Granobetter, M. S.（1973）. The Strength of Week Ties American Journal of Society, 78, 6, 1360-1380.（大岡栄美訳（2006）. 弱い紐帯の強さ　野沢慎司（編）リーディングス・ネットワーク論　勁草書房）

半澤礼之・宮前耕史・浅井継悟（2020）. 教員志望の学生における地域と学校教育の協働の重要性の認識尺度の開発　日本教育工学会論文誌 , 44（Suppl.）, 93-96.

川前あゆみ（2015）. 教員養成におけるへき地教育プログラムの研究 , 学事出版

小山治　（2017）.　グローバル志向は地元キャリア志向と矛盾するのか－地域移動類型を踏まえた地方出身者の分析－　大学評価研究 , 16, 87-98.

Lewin, K.（1951）. Field theory in social science. Ed Dorwin Cartwright. New York: Harper.（猪俣佐登留役（1956）. 社会科学における場の理論　誠信書房）

宮前耕史・平岡俊一・安井智恵・添田祥史（2017）. 持続可能な地域づくりと学校―地域創造型教師のために ぎょうせい

宮前耕史（2016）.「地方創生」時代における「地域に根差した教師」像－理論モデルとしての「地域創造型教師」とその養成プログラムに向けた研究課題 , へき地教育研究 , 70, 53-61.

根岸千悠（2013）. 国立大学教員養成学部におけるアドミッションポリシーの特徴－「求める学生像」の分類を通して－.　千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 , 262, 50-57.

高田康史・堀田治（2017）. 教員養成課程における地域小学校との連携事業を通した学生育成に関する研究　吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）, 増刊号 , 93-98.

田澤実・梅崎修・唐澤克樹（2013）.　進学と就職に伴う地域間移動：全国の大学生データを用いて　サステイナビリティ研究 , 3, 151-167

田澤実・梅崎修（2017）. 大学進学および就職時における若者の地域間移動：優秀な若者人材を地方に集めることは可能か？　生涯学習とキャリアデザイン：法政大学キャリアデザイン学会紀要 , 14（2）, 93-101

山口恵子（2014）. 東京に出ざるをえない若者たち：地方の若者にとっての地元という空間　現代思想 42, 6, 224-236　青土社

山本多喜司・S・ワップナー（編著）（1991）. 人生移行の発達心理学　北大路書房

安井智恵（2019）コミュニティー・スクールにおける地域人材育成に関する一考察－「ふるさと学習」を通じた地域社会の一員としての子ども育成事例から－. 北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要 , 9, 109-119.